

こしえるびと

つむぐストーリー vol.114

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

経営の向上を目指して

室根町矢越

小岩 幸祐 さん

幼い頃から農業は身近な存在

矢越山の鮮やかな新緑が瞳に映る初夏。小岩幸祐さんは牛一頭一頭の観察を毎日欠かさず行う。

水稲や和牛繁殖を家族全員で大規模に営む農家に生まれ、祖父母や両親が力を合せて働く姿を見て育った。「農業をやりたい」と高校から農業を学び、さらに学びを深めるため岩手県立農業短期大学校に進学。父の大輔さんに「畜産は難しいから学んでいた方がいい」と助言され、農業短大では畜産を専攻。畜産の基礎や和牛繁殖では重要となる血統構成を学び、2019年、卒業と同時に就農した。

牛は生き物だから難しい

小岩家の農業経営は分担制で、祖父正助さんが和牛繁殖、大輔さんが水稲

や作業受託、草地、母の沙織さんと姉

の悠璃さんがトマトを担当する。就農後は畜産を中心に経営に携わり、餌やりなどの管理を正助さんに教わり、今では育成牛や子牛の管理を全て任せられるようになった。牛は一頭一頭違うため、餌やりや体調管理もその牛に合ったやり方で行う必要がある。中でも牛ごとの脂肪の付き方には細心の注意を払っている。

6、7年前、牛伝染性リンパ腫（牛白血病）が発生し、幸祐さんの牛舎でも牛が死亡するなど被害を受けた。この時は補助事業を利用し、野菜ハウスや中古ハウスで牛舎を増設。感染牛を隔離するなどの対策を講じ、感染の封じ込めに成功した。

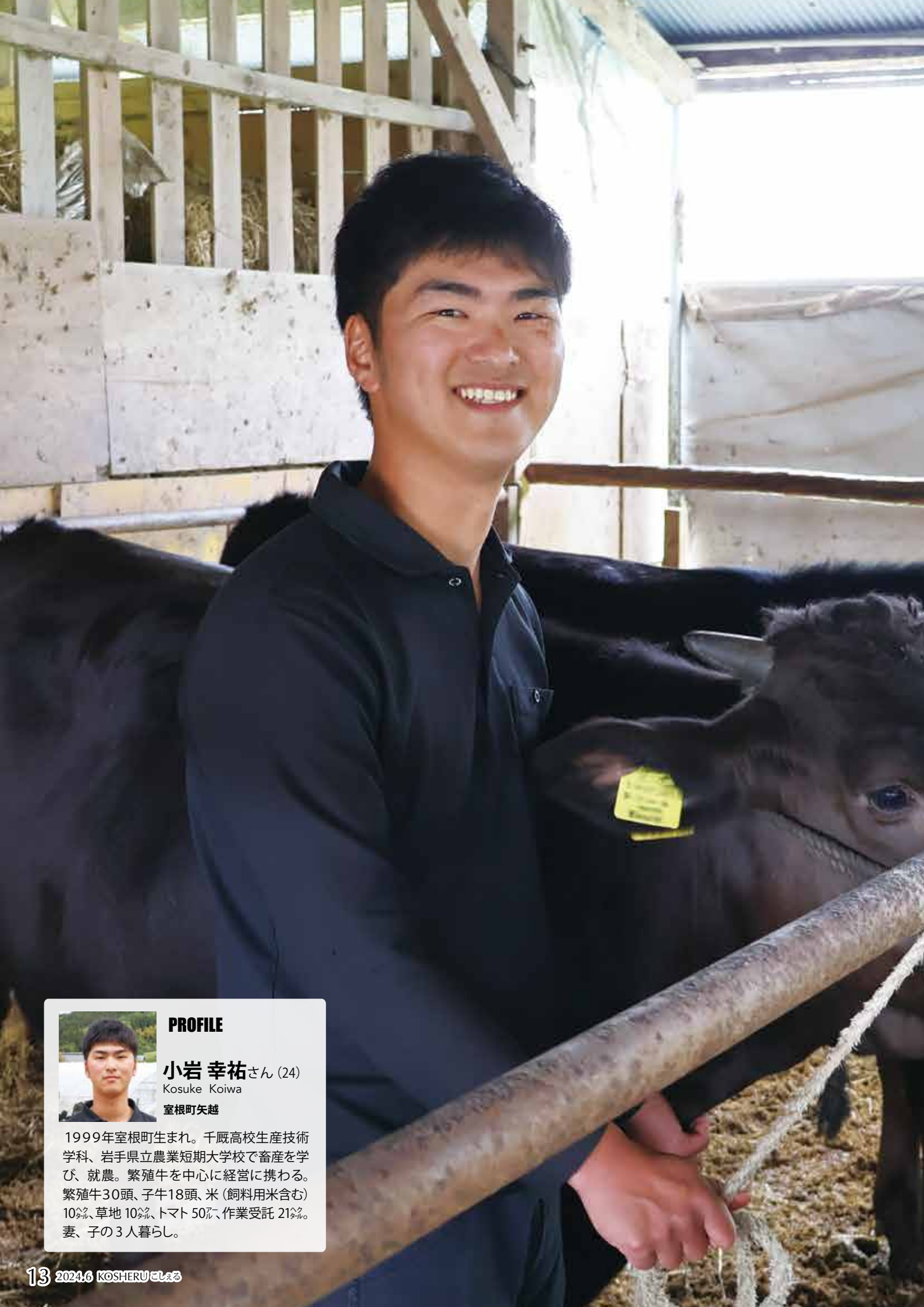
「牛は生き物だから難しいが、それがやりがい」と幸祐さんは話す。

自分でできることを増やして

最近はお肉価格の高騰に経営が圧迫されているのが悩み。生産した子牛をできるだけ高く売りたいが、子牛の価格も低迷し、枝肉相場も上がらない。経費を抑えるため、購入飼料を控えると、それなりの牛しか生産できなくなる。幸祐さんは、良質な自給飼料を生産し購入飼料を減らすことが経営の安定につながると考え、今後は自ら草地管理をしていきたいと思っている。

和牛青年部の活動にも参加し、仲間との情報交換や研修を通して技術向上を図っている。新型コロナウイルス感染症防止のため開催できなかった県外研修が再開し、学ぶ意欲がますます高まっている。

より良い牛の生産と経営の向上へ。幸祐さんの挑戦は始まったばかりだ。



PROFILE

小岩 幸祐さん (24)

Kosuke Koiwa

室根町矢越

1999年室根町生まれ。千厩高校生産技術学科、岩手県立農業短期大学校で畜産を学び、就農。繁殖牛を中心に経営に携わる。繁殖牛30頭、子牛18頭、米(飼料用米含む)10畝、草地10畝、トマト50畝、作業受託21畝。妻、子の3人暮らし。